

【保健環境研究センター11月だより ～今年も手足口病が大流行しました～】

手足口病は、おもに乳幼児が罹患する小児科疾患です。初夏から夏期に流行します。発熱に始まり、手足および口内に発疹を生じることが特徴です。過去には2003年に少し大きな流行がありましたが、2011年はそれをはるかに越える全国的な大流行となりました。

手足口病の原因ウイルスは、エンテロウイルスです。エンテロウイルスはコクサッキー（A群、B群）、エコーなど約70種類あり、毎年異なる種類のエンテロウイルスによる流行があります。今年もコクサッキーA群6型（CA6）が主流で、次いでコクサッキーA群16型（CA16）が多く検出されています。当センターで解析した手足口病の患者検体は9月末日で23症例あり、図1に示したように奈良県で広域に発生があったことがわかります。その中でCA6は8例（34.8%）、CA16は2例（8.7%）検出し、その他のウイルスは検出されませんでした。検出ウイルスの傾向は、全国と同じでした。また、採取週別に検出ウイルスをみると、図2に示したように奈良県では初夏から夏期にはCA6を検出しましたが、9月中旬にはCA16を検出しました。

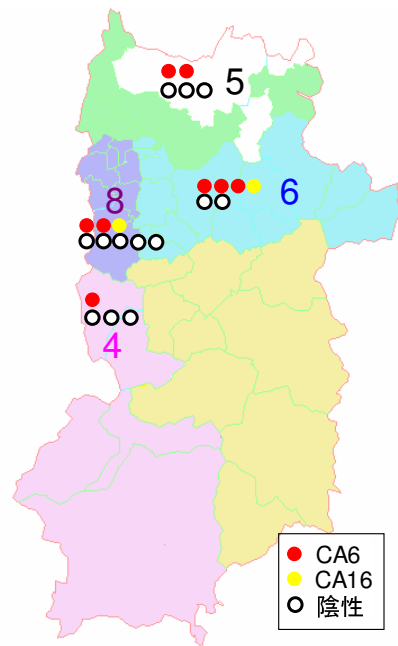


図1. 手足口病患者検体搬入数と検出ウイルス

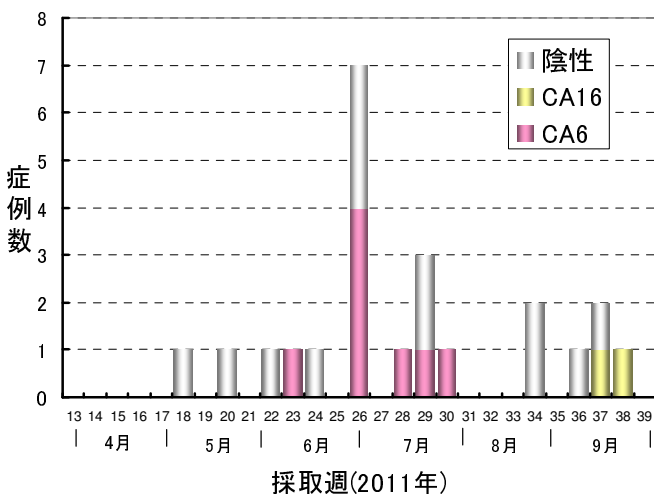


図2. 手足口病患者由来の採取週別ウイルス検出状況

エンテロウイルスは多種類あるので、別の型のウイルスによる手足口病にもう一度罹る可能性があります。今年の流行は終息しつつあるとはいえ、それでもまだ例年より多くの報告が挙がっています。また、2011年の手足口病の発疹の様相は少し異なっている（水疱形成しない発疹がみられる、発疹の大きさが大きいなど）との情報もあります。発熱および発疹があれば早めの受診をおすすめします。

子どもは大人的生活スタイルの影響を受けます。大人も十分な睡眠と規則正しい生活習慣を心がけるようにしましょう、

(ウイルスチーム 岡山 記)